

JAILA 第9回全国大会

プログラム（オンライン開催）

開催校：岡山大学

2021年3月13日（土）

- ※ 翌日3月14日（日）にも特別講演を開催します。
- ※ オンデマンドは、3月20日（土）まで視聴可能です。

JAILA

The Japan Association of International Liberal Arts

日本国際教養学会

本大会について

第9回 JAILA 全国大会はオンラインで開催いたします。

本プログラムは、発表の一覧および概要を掲載したものです。参加にかかわる事項については、「大会実施要項」および「参加ガイド」をご覧ください。「大会実施要項」、「参加ガイド」は、ともに JAILA Web サイトに掲載（リンク）してあります。

ご不明な点がございましたら、大会運営事務局（office@jaila.org）にお問い合わせください。

以下は、大会実施要項等にも記載してある内容ですが、重要事項でもありますので、改めて掲載いたします。

▶ 事前の参加申込が必要です（会員は申込不要）

- ・ 申込手続き方法につきましては、「大会実施要項」をご覧ください

▶ 参加（視聴）について

- ・ 大会特設サイトからアクセスいただきます
- ・ 大会特設サイトへのアクセスに必要な情報は（申込手続き完了後）メールにてお知らせします
- ・ 大会特設サイトは、大会開催日 [3月13日（土） 9:00] にオープンします
- ・ **本プログラムには、大会特設サイトへのアクセスに関わる情報は掲載していません**

▶ 発表形式について

- ・ ライブ型とオンデマンド（動画配信）型の2つです
- ・ 各発表の発表形式につきましては、本プログラムでご確認ください

ライブ型発表について：

- ・ **3月13日（土）** [講演・口頭発表] と **3月14日（日）** [特別講演] の両日に行われます
- ・ 発表の時間は、本プログラムでご確認ください
- ・ Zoom を用いて実施されます
- ・ 事前に Zoom アプリのインストールを行ってください
- ・ 途中からでも参加（視聴）できます

オンデマンド発表について：

- ・ **3月13日（土）～3月20日（土）** まで視聴できます
- ・ 期間内であれば時間帯を問わず視聴できます
- ・ 配信内容は、動画以外に PDF 形式のファイルもあります

JAILA

— 第9回全国大会 プログラム(ライブ) —

日本国際教養学会： 令和3年3月13日(土) オンライン開催
(岡山大学全学教育・学生支援機構基幹教育センター共催)

9:20-9:30		開会式
Session 1 司会		和田 あずさ (兵庫教育大学)
9:40-10:10	発表 1	「教育文体論を用いたライティング分析—日本人EFL学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る」 吉田 安曇(兵庫県立大学(院))・寺西 雅之(兵庫県立大学)・西原 貴之(広島大学)・那須 雅子(岡山大学)
10:10-10:40	発表 2	“Using Usage-Based Linguistics in ESL Composition Classes” Stephen Markve (Independent Researcher)
10:40-11:10	発表 3	「鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが児童の音楽に対する態度に与える影響—アンケート調査及び半構造化面接に基づいた考察」 小野 隆洋 (山口芸術短期大学)・岩中 貴裕 (山口学芸大学)
11:10-11:20		休憩
Session 2 司会		吉田 安曇 (兵庫県立大学(院))
11:20-11:50	発表 4	「アメリカのリベラルアーツ・カレッジの現況」 長野 公則 (国際公認投資アナリスト・博士(教育学・東京大学))
11:50-12:20	発表 5	「「越境作家」を研究する「私」—文学研究における当事者性の問題—」 トーマス・ブルック (神戸大学(院))
12:20-12:50	発表 6	「ESPと文学的教材—「ビジネス英語」で使う文学の映画—」 久世 恭子 (東洋大学)
12:50-13:30		昼休み
13:30-14:30	講演	講演 (ZOOMウェビナー) 「21世紀のイギリス王室—その知られざる素顔」 講師：君塚 直隆 (関東学院大学教授) 司会：北 和丈 (東京理科大学准教授)
Session 3 司会		岩中 貴裕 (山口学芸大学)
14:40-15:10	発表 7	「日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき：誤答分析を通して」 西原 貴之 (広島大学)
15:10-15:40	発表 8	「「ヘルスツーリズム」の展望と期待～超高齢化社会と観光業の観点から」 栗栖 美帆 (フリーランス講師・非常勤講師)
15:40-16:10	発表 9	「小学校における英語音声指導の変容に関する事例研究—英語に堪能な若手専科教師に焦点をあてて—」 和田 あずさ (兵庫教育大学)
16:10-16:20		休憩
Session 4 司会		寺西 雅之 (兵庫県立大学)
16:20-16:50	発表 10	「映画を活用した仮定法と関係詞の指導法—コミュニケーション的な文法指導を目指して—」 松浦 加寿子 (中国学園大学)
16:50-17:20	発表 11	「感覚と創造の遊び場の提案～創造性教育・STEAM教育・SDGsをめぐる展開の可能性～」 尾崎 未登利・伊藤 慶孝・戸田 実咲・西澤 智子・頼 静雨 (岡山大学大学院修士課程・課題解決学習・PBL (=Project-Based-Learning)・チームcre/borderless)・岡田 和也 (岡山大学大学院)
17:25-17:50		閉会式・総会・会長報告
18:00-19:00		情報交換会・懇親会 (オンライン) (参加費・無料)

JAILA

— 第9回全国大会 プログラム — (口頭発表オンデマンド)

日本国際教養学会： 視聴期間 令和3年3月13日（土）～令和3年3月20日（土）
(岡山大学全学教育・学生支援機構基幹教育センター共催)

発表1	「日本語(母語能力)を活かした英語学習法の開発 — 大学一般教育の場合 —」 中尾 佳行(福山大学)
発表2	「オーストラリアの日本語教育におけるALTの自律的学び」 坂本 南美(岡山理科大学)
発表3	「コーパスから読む児童文学と感覚表現」 奥 聡一郎(関東学院大学)
発表4	「マーガレット・アトウッドの児童書における「サバイバル」の意義」 風早 由佳(岡山県立大学)
発表5	「外国人児童生徒の日本語能力と指導方法に関する一考察」 乾 美紀(兵庫県立大学)・赤松 七海(兵庫県立大学学生)・坂本 みのり(兵庫県立大学学生)・丸山 大輝(兵庫県立大学学生)・岩田 直人(兵庫県立大学学生)・任 遠(兵庫県立大学学生)
発表6	「英語多読授業のオンライン実践報告」 草薙 優加(鶴見大学)・深谷 素子(鶴見大学)・小林 めぐみ(成蹊大学)
発表7	「ラオス少数民族の就学経験に関するフィールド調査 — モン族とレンテン族の比較から —」 三木 香菜子(兵庫県立大学学生)・乾 美紀(兵庫県立大学)
発表8	「ラオスの「地図にない村」に学校を — 学生国際協力団体CHISE(チーズ)の挑戦 —」 北川 愛夏(兵庫県立大学学生)・奥山 初音(関西学院大学学生)

JAILA

— 第9回全国大会 プログラム (ポスター発表オンデマンド) —

日本国際教養学会： 視聴期間 令和3年3月13日(土)～ 令和3年3月20日(土)

発表1	「理系学生のためのオーストラリア海外研修の実践と考察」 大内 幹雄(兵庫県立大学)・朝熊 裕介(兵庫県立大学)・市川 一夫(兵庫県立大学)
発表2	“Reflections on Secondary Data Analysis: A Method to Extrapolate Social Tendencies” Hachiro Uchiyama (Doshisha University), Hiroki Inoue (Niigata University of Health and Welfare), Mark Taylor (University of Hyogo)
発表3	「オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「精読本を多読」する実践の考察」 那須 雅子(岡山大学)
発表4	「David Copperfield におけるキャラクター間の呼称について」 笠本 晃代(岡山大学(院))
発表5	「渡日困難新生生のための新規開講日本語科目の開発とオンライン教育の意義」 牛田 英子(岡山大学)
発表6	“A Corpus-Based Analysis of Japanese Junior and Senior High School English Textbooks” Satoko Kinoshita (Temple University Master of Science in Education Teaching English to Speakers of Other Languages 修了生)
発表7	“Academic Ethics Regarding Plagiarism for Students” Hideo Kobayashi (University of Hyogo)
発表8	「異文化理解に関する一考察—人間関係におけるシニオリティと言葉遣い—」 川浦 清雅(兵庫県立大学学生)
発表9	「ジェンダーから見るセンター試験英語問題」 佐藤 繭香(麗澤大学)・土屋 結城(実践女子大学)・伊澤 高志(立正大学)・檜村 真由(東京工業高等専門学校)・北 和丈(東京理科大学)・瀧口 美佳(立正大学)
発表10	“The Creative Effects of Kenneth Koch’s Instruction of Poetry Writing in Japanese High School EFL Classrooms” Yuka Urushibata (Shizuoka Johoku High School / Okayama University Graduate School of Humanities and Social Sciences Doctor's Course)
発表11	“How Environmental Issues are Addressed in U.N. News” Soh Sakamoto (University of Hyogo (Student)) / Masayuki Teranishi (University of Hyogo)
発表12	「観光コミュニケーションに関する一考察—英語観光パンフレットのテキスト分析から見えること—」 藤本 めぐ里(兵庫県立大学学生)・寺西 雅之(兵庫県立大学)
発表13	「児童の感性を育む音楽科授業実践の提案—第6学年における鑑賞領域に焦点をあてて—」 藤江 友香(兵庫教育大学(院))
発表14	「アメリカのコモン・コアにおけるEnglish Language Artsのカリキュラム構成から大学英語教育への応用を考える」 杉本 裕代(東京都市大学)

JAILA

— 第9回全国大会 プログラム — (ポストコンフェレンス・イベント)

日本国際教養学会： 令和3年3月14日（日）14：00～15：30
オンライン開催（ZOOMウェビナー）

特別講演

日本語と日本との半同化—「半」でも人生が二倍面白くなった—
Half Immersed and Doubly Enriched: A Life with Japanese and Japan

講師：トム・ガリー（東京大学教授）
ディスカッサント：那須 雅子（岡山大学准教授）

概要：

26歳のときに日本へ放浪してきた講師は当初、日本語を学ぶつもりも定住するつもりもなかった。しかし、東京の安宿に一旦落ち着いたら日本語の勉強に没頭して、その言語を通してこの国を知ろうとすることになった。それ以来の38年間も、翻訳や教育を職業としながらこの奥が深い言葉と社会に魅惑され続けてきた。そのような特異な人生がどこまで他の人に参考になるかどうかについて、この講演を通して聴者のみなさんと一緒に考えたいと思う。

*本講演は、科研費(18K00831)の助成を受けたものである。

研究発表・講演概要 目次

講演 **ライブ [Zoom ウェビナー]** 3月13日(土) 13:30-14:301

21世紀のイギリス王室—その知られざる素顔 1

ポストコンフェレンス・イベント 特別講演 **ライブ [Zoom ウェビナー]** 3月14日(日) 14:00-15:301

日本語と日本との半同化—「半」でも人生が二倍面白くなった— Half Immersed and Doubly Enriched: A Life with Japanese and Japan 1

研究発表・午前の部 **ライブ [Zoom ミーティング]** 3月13日(土) 9:40-12:50 2

教育文体論を用いたライティング分析—日本人 EFL 学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る 2

Using Usage-Based Linguistics in ESL Composition Classes 2

鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが児童の音楽に対する態度に与える影響 —アンケート調査及び半構造化面接に基づいた考察 3

アメリカにおけるリベラルアーツ・カレッジの現況 3

「越境作家」を研究する「私」—文学研究における当事者性の問題— 3

ESP と文学的教材—「ビジネス英語」で使う文学の映画— 3

研究発表・午後の部 **ライブ [Zoom ミーティング]** 3月13日(土) 14:40-17:204

日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき：誤答分析を通して 4

「ヘルスツーリズム」の展望と期待～超高齢化社会と観光業の観点から 4

小学校における英語音声指導の変容に関する事例研究 —英語に堪能な若手専科教師に焦点をあてて— 4

映画を活用した仮定法と関係詞の指導法—コミュニケーション型な文法指導を目指して— 5

感覚と創造の遊び場の提案～創造性教育・STEAM 教育・SDGs をめぐる展開の可能性～ 5

研究発表 **オンデマンド** 3月13日(土)～3月20日(土)6

日本語(母語能力)を活かした英語学習法の開発 —大学一般教育の場合— 6

オーストラリアの日本語教育における ALT の自律的学び 6

コーパスから読む児童文学と感覚表現 6

マーガレット・アトウッドの児童書における「サバイバル」の意義 7

外国人児童生徒の日本語能力と指導方法に関する一考察 7

英語多読授業のオンライン実践報告 7

ラオス少数民族の就学経験に関するフィールド調査 —モン族とレンテン族の比較から— 8

ラオスの「地図にない村」に学校を —学生国際協力団体 CHISE(チーズ)の挑戦— 8

ポスターセッション **オンデマンド** 3月13日(土)～3月20日(土)9

理系学生のためのオーストラリア海外研修の実践と考察 9

Reflections on Secondary Data Analysis: A Method to Extrapolate Social Tendencies 9

オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「精読本を多読」する実践の考察	9
David Copperfield におけるキャラクター間の呼称について	10
渡日困難新生のための新規開講日本語科目の開発とオンライン教育の意義	10
A Corpus-Based Analysis of Japanese Junior and Senior High School English Textbooks	10
Academic Ethics Regarding Plagiarism for Students	11
異文化理解に関する一考察 —人間関係におけるシニオリティと言葉遣い—	11
ジェンダーから見るセンター試験英語問題	11
The Creative Effects of Kenneth Koch's Instruction of Poetry Writing in Japanese High School EFL Classrooms.....	12
How Environmental Issues are Addressed in U.N. News.....	12
観光コミュニケーションに関する一考察 — 英語観光パンフレットのテキスト分析から見えること —	12
児童の感性を育む音楽科授業実践の提案—第 6 学年における鑑賞領域に焦点をあてて—	13
アメリカのコモン・コアにおける English Language Arts のカリキュラム構成から大学英語教育への応用を考える	13

JAILA 第9回全国大会 招待講演及び研究発表概要

講演 **ライブ [Zoom ウェビナー]** 3月13日(土) 13:30-14:30

21世紀のイギリス王室—その知られざる素顔

君塚 直隆 関東学院大学 教授

ブレグジットで揺れ動くイギリス政府は、ヨーロッパをはじめ各国と種々の協定を結び直すとともに、EU 離脱に反対するスコットランドなど連合王国内の対応も迫られている。そのようなときに、イギリスに「継続性と安定性」をもたらしてくれるのが、今年で在位 69 年を迎えるエリザベス女王を筆頭とする王室の存在なのである。「君臨すれども統治せず」が基本であるはずの王室がなぜ重要となるのか。21 世紀の立憲君主制の本質にせまる。

ポストコンフェレンス・イベント 特別講演 **ライブ [Zoom ウェビナー]** 3月14日(日) 14:00-15:30

日本語と日本との半同化—「半」でも人生が二倍面白くなった—

Half Immersed and Doubly Enriched: A Life with Japanese and Japan

トム・ガリー 東京大学 教授

26 歳のときに日本へ放浪してきた講師は当初、日本語を学ぶつもりも定住するつもりもなかった。しかし、東京の安宿に一旦落ち着いたら日本語の勉強に没頭して、その言語を通してこの国を知ろうとすることになった。それ以来の 38 年間も、翻訳や教育を職業としながらこの奥が深い言葉と社会に魅惑され続けてきた。そのような特異な人生がどこまで他の人に参考になるかどうかについて、この講演を通して聴者のみなさんと一緒に考えたいと思う。

教育文体論を用いたライティング分析ー日本人 EFL 学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る

吉田 安曇 兵庫県立大学大学院環境人間学研究科博士後期課程

寺西 雅之 兵庫県立大学 教授

西原 貴之 広島大学 准教授

那須 雅子 岡山大学 准教授

日本における早期英語教育に警鐘を鳴らし、母語教育の重要性を論じる研究や意見は多いが、実際に母語教育が外国語学習に及ぼす影響について具体的なエビデンスを示した研究例は少ない。本発表ではまず、日本人英語学習者に対して実施したアンケート及びインタビューの分析結果に基づき、読書を中心とした母語教育が英語習得に与える影響について考察する。さらに同学習者を対象に行った英語ライティング課題を取り上げ、「母語読書グループ」と「そうでないグループ」の間に見られる英語力の違いや文体の特徴を分析し、「母語教育」及び「早期英語教育」と英語習熟度との関連について考察する。最後に、分析結果を踏まえて、母語と英語学習のバランスを中心に、今後の英語教育への示唆について考察する。

Using Usage-Based Linguistics in ESL Composition Classes

Stephen Markve Independent Researcher

Students can develop their understanding of cross-linguistic variation and of language/cognition in general by examining and rationalizing the non-prototypical meanings of, e.g. common verbs. Following Gibbs' (2006) explanation of semantic sub-categories of 'stand' I ask students to explain similar semantic extensions in their L1 in an attempt to engage them in identifying motivations for claiming new semantic territory and thereby appreciated alternative points of view.

In this presentation I will describe my work, as performed in ESL Composition classes in Japan, Michigan, and Qatar, highlighting successes, challenges, and future ideas.

Gibbs, R. (2006). Embodiment and cognitive science. NY: CUP.

鑑賞と表現を融合した音楽ワークショップが児童の音楽に対する態度に与える影響

—アンケート調査及び半構造化面接に基づいた考察

小野 隆洋 山口芸術短期大学 准教授

岩中 貴裕 山口学芸大学 教授

本研究は、文化芸術活動によって児童の音楽に対する態度がどのように変化するかを明らかにすることをその目的とする。785名の児童と5名の教員が調査に参加した。児童は文化芸術活動に従事した後アンケートに回答した。教員に対しては、半構造化面接を実施した。収集したデータを分析した結果、文化芸術活動によって、児童の感情面、音楽に対する態度、表現しようとする意欲に肯定的な影響がもたらされることが示唆された。

アメリカにおけるリベラルアーツ・カレッジの現況

長野 公則 国際公認投資アナリスト・博士（教育学・東京大学）

リベラルアーツ・カレッジの存在は、アメリカの大学制度の特色の一つである。アメリカのリベラルアーツ・カレッジは、学生数が2千名前後の少人数で、学士課程教育に重点が置かれている。また学生のキャンパス内外での体験学修に特色がある。本発表では、アメリカのリベラルアーツ・カレッジの現況を学士課程教育と財務の観点から分析する。

「越境作家」を研究する「私」—文学研究における当事者性の問題—

トーマス・ブルック 神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程

複雑な文化的背景を持ち、一つの「国民文学」に還元されにくい「越境文学」をめぐる研究は多くの難問に面している。客観的な論述は、研究対象からの一定の距離を条件とするが、「越境文学」の「特殊性」ゆえ、それを扱う論者は自らの「当事者性」に向き合わざるを得ず、研究対象との適切な距離を確保することが困難になる。本発表では、日本語で創作を行う「越境作家」をめぐる先行研究に触れつつ、「当事者性」の問題を追究する意義と可能性を考察する。

ESPと文学的教材—「ビジネス英語」で使う文学の映画—

久世 恭子 東洋大学 准教授

文学や映画などの創造的教材は、英語教育においてその意義は認められているものの、実際の授業で使う場合には場面が限定される。本発表では、大学経営学部のビジネス英語の授業で *The Remains of the Day*（映画）を用いた実践例を取り上げ、言語活動や学習者の反応を紹介することによって、ESP (English for specific purposes) の授業など従来より広範な状況で文学的教材を使用する意味を議論する。

日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずき：誤答分析を通して

西原 貴之 広島大学 准教授

本発表では、日本人大学生英語学習者の文学的物語教材読解時のつまずきを調査した結果を報告する。学習者に内容理解に関する設問に取り組みせ、多くの学習者がつまずきを示した箇所を文章中から抽出した。その結果、「学習者の語彙力不足が関わる箇所」、「学習者の文法知識不足が関わる箇所」、「学習者の英語文化に関する知識不足が関わる箇所」、「客観的相関物が見られる箇所」、「命題間の関連性が明示されていない箇所」、「修飾的な表現が用いられている箇所」、で多くの学習者がつまずきを起こしていた。

「ヘルスツーリズム」の展望と期待～超高齢化社会と観光業の観点から

栗栖 美帆 フリーランス講師、非常勤講師

我が国は現在、少子高齢化社会であり、超高齢化社会が抱える医療費・介護費の増加、労働者人口の減少や地域の過疎化問題に直面している。

本発表では厚生労働省が定めた「健康寿命延伸プラン」の観点から、健康と観光をテーマにした「ヘルスツーリズム」を考察する。ヘルスツーリズムを通して、健康寿命の延伸が期待できるだけでなく、日本の自然豊かな国土や四季を活かした各都道府県の観光業を盛り上げることは、地域の活性化や少子化対策、さらには、コロナ禍で落ち込んだ日本の基幹産業である観光業界にも光を当てることになると考える。

小学校における英語音声指導の変容に関する事例研究

—英語に堪能な若手専科教師に焦点をあてて—

和田 あずさ 兵庫教育大学 助教

2020年の学習指導要領全面実施により小学校英語教育が拡充される中、文脈固有性を踏まえた多様な実践の共有が求められている。特に英語音声指導は、小学校英語教育の中核に位置つきながら、目標や内容が明示されておらず、そのあり方は個の教師に委ねられている。そこで本発表では、英語に堪能な若手専科教師を事例とし、参与観察と継続的な省察から導かれた英語音声指導とその拠り所となる教師の信念の変容過程について報告する。

映画を活用した仮定法と関係詞の指導法—コミュニケーションな文法指導を目指して—

松浦 加寿子 中国学園大学 准教授

英語教材としての映画は、動機付けやリスニング指導などに有効であるとする研究は見られるが、文法指導に関する研究はほとんど見られない。本研究の目的は、映画を活用した文法指導と文字情報のみの文法指導を比較し、各指導法による文法項目の定着度を検証することである。本発表では、理解が難しいとされる仮定法と関係詞を取り上げる。映画における具体的なコミュニケーションの場面を通してより効果的な文法指導を提示したい。

感覚と創造の遊び場の提案～創造性教育・STEAM教育・SDGsをめぐる展開の可能性～

尾崎 未登利・伊藤 慶孝・戸田 実咲・西澤 智子・頼 静雨

(岡山大学大学院修士課程・課題解決学習・PBL (=Project-Based-Learning)・チーム cre/borderless)

岡田 和也 岡山大学大学院 准教授

本発表は、多義的視座 (creation+borderless) から、アジア圏の人々がそれぞれの境界を越えて繋がる“遊び場”のプロジェクト提案の内実を明らかにする。創造性を刺激するワークショップを展開して感覚を遊びの観点から創造性教育の可能性を問い、性別・年齢・文化・国籍等の多様な集団に、「ことば」の再認識や五感に働きかける遊びによる変容・差異・受容に関して論じる。オンライン環境において人と人が繋がり、時間や空間を超えて創造的な瞬間を共有することの可能性についても報告する。

研究発表 **オンデマンド** 3月13日(土)～3月20日(土)**日本語（母語能力）を活かした英語学習法の開発
—大学一般教育の場合—**

中尾 佳行 福山大学 教授

日本語に際立ってあるものが英語に全くないものでもないし、また英語に際立ってあるものが日本語に全くないものでもない。両言語は共通項をもちながら、それぞれ際立った特徴がある。大学の一般英語の授業において、初めに両言語の共通点と相違点に注目させる小テストを行い、その気づきをセットテキスト（リーディング力を高める教材）の読解に転移するよう促しを行った。小テストの文脈を深く、同時にその文脈から離れて抽象的に広く理解することを試みた。どのような成果と課題点があったか、一つのケーススタディを報告したい。

オーストラリアの日本語教育における ALT の自律的学び

坂本 南美 岡山理科大学 准教授

日本の公立小・中・高等学校では、英語授業に Assistant Language Teacher (ALT) が導入されてから 30 年以上、日本人英語教師や小学校の担任教師と ALT とのティーム・ティーチングが実現し、コミュニケーション型言語活動が実践されてきた。他国の ALT はどのように外国語授業に関わっているのだろうか。本研究では、日本とオーストラリアの ALT について比較しながら、パースで日本語教育に携わる ALT の自律的な学びを検証する。

コーパスから読む児童文学と感覚表現

奥 聡一郎 関東学院大学 教授

本発表では、コーパス化された英米児童文学を素材に、登場人物と感覚表現に焦点をあて、文体的な特徴を明らかにする。感覚にかかわる動詞、形容詞、副詞を日英対照的な視点からとらえ直し、成長物語やファンタジーなどのジャンルにみられる表現の特徴をコーパス文体論の視点から分析する。さらに言語教育への応用として読解力養成の必要性も踏まえ、児童文学作品を読解教材とするために具体的な方略を提示したい。

マーガレット・アトウッドの児童書における「サバイバル」の意義

風早 由佳 岡山県立大学 准教授

Margaret Atwood(1939-)はカナダの作家、詩人、批評家である。これまで60冊以上の作品を出版しており、数々の文学賞を受賞している。AtwoodはThe Journal of Susanna Moodie(1970)においてカナダに生きることを選択する者は“Violent Duality”を選択し続けることになる」と述べているが、この「二重性」はAtwoodの小説、詩集を読み解く上で重要なテーマとなる。本発表では、初期詩集The Circle Game(1966)、The Journal of Susanna Moodieを取り上げ、カナダの自然描写の中に現れるViolent Dualityの表出について分析する。

外国人児童生徒の日本語能力と指導方法に関する一考察

乾 美紀 兵庫県立大学 教授

赤松 七海 兵庫県立大学 学生

坂本 みのり 兵庫県立大学 学生

丸山 大輝 兵庫県立大学 学生

岩田 直人 兵庫県立大学 学生

任 遠 兵庫県立大学 学生

本研究の目的は、外国人児童生徒の日本語能力の差異がどのような要因(家庭環境、国籍、来日年数、本人の性格等)により生み出されているのかについて、明らかにすることである。そしてその日本語能力の違いを元に、子どもたちをどのように指導するのが効果的なのかを実際の教育現場にて実践してみることである。

研究の方法としては子どもたちへのアンケートや地域ボランティアへのインタビューを採用する。これらの結果から今後の外国人児童生徒への教育支援に活かす方法を検討する。

英語多読授業のオンライン実践報告

草薙 優加 鶴見大学 教授

深谷 素子 鶴見大学 准教授

小林 めぐみ 成蹊大学 教授

本研究グループは、これまで英語多読書籍を使用し多様な多読アクティビティを開発してきたが、今般の新型コロナウイルス感染拡大によりオンライン対応を余儀なくされている。本発表では、このような状況の中、いかに電子多読書籍の使用し、双方型遠隔授業による多読の指導を実施したかについて、具体的な対応方法・工夫、対面式とオンライン形式の長所短所、学生の反応（アンケート結果）等とあわせて報告したい。

ラオス少数民族の就学経験に関するフィールド調査 —モン族とレンテン族の比較から—

三木 香菜子 兵庫県立大学 学生
乾 美紀 兵庫県立大学 教授

開発途上国において少数民族は教育へのアクセスが限定されがちである。本研究の目的はラオスの少数民族の人たちが「いつなぜ学校を辞めたか」について明らかにするために、インタビュー調査を行った結果を報告する。特にラオス北部に住むモン族とレンテン族を調査対象とし、同じ少数民族でもどのような差異があるかについて検討する。さらに、フィールド調査の結果を起点として、どのような方法であれば学校を辞めることを防ぐことができたかについて検討する。

ラオスの「地図にない村」に学校を —学生国際協力団体 CHISE(チーズ)の挑戦—

北川 愛夏 兵庫県立大学 学生
奥山 初音 関西学院大学 学生

本発表の目的は、学生団体 CHISE の活動・支援の報告をするとともに、現地での活動から見えてくる教育問題や現状を分析し、明らかにすることである。まず、昨年から新しく支援を始めた村を紹介し、旧校舎から新校舎ができるまでの支援の流れ（募金、資金調達・寄付について）を報告する。次に、コロナ禍において新たに挑戦した「オンラインスタディーツアー」によって得た現地の情報をもとに、今後の活動計画について報告する。

ポスターセッション **オンデマンド** 3月13日(土)~3月20日(土)

理系学生のためのオーストラリア海外研修の実践と考察

大内 幹雄 兵庫県立大学 教授

朝熊 裕介 兵庫県立大学 准教授

市川 一夫 兵庫県立大学 名誉教授

兵庫県立大学工学部、理学部学生を対象にしたオーストラリアでの短期海外研修プログラムについて、学術交流提携大学のカーティン大学との交流の成果を紹介する。海外研修による学生の国際交流・教育プログラムを基にして、25年間にわたるカーティン大学との学生交流、教育研究交流の成果と大学間の国際交流について考察する。

Reflections on Secondary Data Analysis: A Method to Extrapolate Social Tendencies

Hachiro Uchiyama, Doshisha University

Hiroki Inoue, Niigata University of Health and Welfare

Mark Taylor, University of Hyogo

The acceptance of secondary data analysis as a mode of methodological practice has made gradual but certain progress since the 1970s, particularly in the United States and Germany. In contrast, use of secondary data analysis as a methodological practice in Japan remains comparatively low. This presentation aims to familiarize interested researchers with this useful tool of data analysis. Both advantages and disadvantages of secondary data analysis are examined. A study utilizing the Japanese General Social Survey (JGSS) is incorporated. The JGSS data are used to scrutinize factors influencing the level of self-assessed reading comprehension in English among the adult population in Japan.

オーラルヒストリーによる英語学習法に関する質的研究：「精読本を多読」する実践の考察

那須 雅子 岡山大学 准教授

オーラルヒストリーの手法を援用し、外国語学習の成功者を対象にその学習履歴や体験に関するインタビューを実施し、約40名のデータを蓄積した。本発表では、これらの口述記録の中から、易しく書かれた多読用ではなく精読用の英語を「多読」し、短期間で大学受験レベルの英語力を身に付けた学習者のインタビューを抽出し、その実践の詳細を分析し、考察する。

David Copperfield におけるキャラクター間の呼称について

笠本 晃代 岡山大学大学院博士後期課程

David Copperfield (1849-50)は、英国作家 Charles Dickens の前半生の体験が創作化された広い意味での自伝的長編小説である。この作品には、様々なキャラクター独自の言語が存在する。本発表では、キャラクターの職業、社会的身分、性別などを考慮に入れながら、現代では希少となった呼称の用法とその機能に焦点を当て、親愛の情を表す語を用いた呼称、普通名詞を用いた呼称、名詞相当語句による呼称の三つの用法に分類して分析・考察する。

渡日困難新入生のための新規開講日本語科目の開発とオンライン教育の意義

牛田 英子 岡山大学 准教授

本発表では新型コロナウイルス感染拡大防止対策強化により、渡日不可能となった新入生のための新規特別開講教養教育科目「岡山大学留学日本語研修」（中上級 1、中上級 2、初級）の開発について報告する。変化し続ける世界のコロナ情勢と入国制限、大学のコロナ対策、新入生のニーズと渡日予定などを考慮し、柔軟に対応できるオンライン授業のコース設計と学習活動、オンライン教育の利点と課題、その意義について考察する。

A Corpus-Based Analysis of Japanese Junior and Senior High School English Textbooks

Satoko Kinoshita

Temple University Master of Science in Education Teaching English
to Speakers of Other Languages 修了生

In this study the vocabulary items in Japanese junior high and high school English textbooks are to be analyzed with a focus on vocabulary size and lexical variation. All six textbooks picked up in the study were written based on the Course of Study and officially approved by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). First, I investigate the vocabulary size using the online lexical profiler VocabProfile on Tom Cobb's Complete Lexical Tutor site. The BNC-20 corpus was used to identify the levels of lexis in the texts and CLASSIC was used to identify how many items from the Academic Word List (Coxhead, 2000) are in the texts. Then, I consider if they are appropriate for achieving the objectives proposed by MEXT.

Academic Ethics Regarding Plagiarism for Students

Hideo Kobayashi University of Hyogo

This study addresses a survey given to university students in Japan about academic ethics regarding plagiarism. In Japanese universities, students are usually required to write term papers and the professors usually enhance the students' awareness about plagiarism. Some professors offer solid guidance about academic ethics regarding plagiarism, whereas others do not. The author surveyed the understanding of plagiarism among 141 freshman students of one Japanese university in the year 2020. The students showed keen interest in learning about the academic ethics of plagiarism and after the study, the students put into practice a correct knowledge of how to make citations without resorting to plagiarism.

異文化理解に関する一考察 一人間関係におけるシニオリティと言葉遣い

川浦 清雅 兵庫県立大学 学生

国際化が進むにつれ、国内外で展開される人々の異文化交流が益々身近なものになっている。しかしながら、実際の異文化交流においては、当然のように感じる日頃の言動も、全く異質なものと捉えられ、人間関係の摩擦の原因ともなりうる。本研究では、日英語圏文化における対話者の年齢と言葉遣いの関係に焦点を当て、日本語及び英語の母語話者に対してアンケート調査を実施した。本発表ではその詳細を紹介し、両者の年齢に対する感覚の違いを明らかにすることで、異文化交流をスムーズにするための考察を行なう。

ジェンダーから見るセンター試験英語問題

佐藤 繭香 麗澤大学 准教授

土屋 結城 実践女子大学 准教授

伊澤 高志 立正大学 准教授

樫村 真由 東京工業高等専門学校 准教授

北 和丈 東京理科大学 准教授

瀧口 美佳 立正大学 准教授

1990年から約30年間続き、昨年度で終了を迎えた大学入試センター試験をこれまで延べ1,500万人が受験してきたという事実は、この試験の内容がそれだけの数の受験生に影響を与えたということの意味する。本発表では、センター試験開始とほぼ同時期に施行された1989年の学習指導要領で男女同一の教育課程編成とすることが定められたことを踏まえ、果たしてセンター試験は指導要領に謳われたジェンダー平等の理念を反映してきたか否かについて、英語問題の具体的な分析を一例に検証する。

The Creative Effects of Kenneth Koch's Instruction of Poetry Writing in Japanese High School EFL Classrooms

Yuka Urushibata

Shizuoka Johoku High School /

Okayama University Graduate School of Humanities and Social Sciences Doctor's Course

This empirical study examines the creative effects of Kenneth Koch's poetry writing instruction on Japanese high school EFL learners. His theory of poetry writing is based on the process of influence and imitation, which can be further adapted to the realities of Japanese EFL classrooms. The instruction of listening to pop songs (influence) and understanding the lyrics or Koch's students' poems compiled in *Wishes, Lies, and Dreams* (imitation) seems to play a major role to trigger Japanese students' poetic impulse. A close analysis of their creative writing performance is employed to clarify the creative effects of Kenneth Koch's instruction.

How Environmental Issues are Addressed in U.N. News

Soh Sakamoto University of Hyogo (Student)

Masayuki Teranishi University of Hyogo

This study focuses on media bias. The appearance of wide range of media, to which technological advancement and freedom of expression contribute, has helped not only polarize people's political positions, but also sow doubt in scientific facts. Some people believe that the media gloss over the truth or sweep inconvenient information under the carpet in order to satisfy the masses. Based on scientifically-grounded theories, this study delves into how the media report the news. Further, it addresses the incendiary vocabulary used in the media and considers to what extent the words are skewed and inappropriate.

観光コミュニケーションに関する一考察 — 英語観光パンフレットのテキスト分析から見えること —

藤本 めぐ里 兵庫県立大学 学生

寺西 雅之 兵庫県立大学 教授

2020年のコロナ感染拡大以前までは、政府のインバウンド政策により外国人観光客が急増し、2018年には訪日外国人観光客が2013年の約3倍である3119万人を突破していた。外国人観光客の増加に伴い、日本国内でのコミュニケーションのトラブルも増加する状況にある。コロナ収束後を見据えて、本研究では、日本文化を紹介する英語観光パンフレットに焦点を当て、外国人観光客が日本文化をより深く理解し、楽しむための工夫と改善点について翻訳論・文体論の観点から考察する。

児童の感性を育む音楽科授業実践の提案—第6学年における鑑賞領域に焦点をあてて—

藤江 友香 兵庫教育大学（院）

小学校学習指導要領には、子ども達がよりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身につけることが必要であり、それは学校教育で長年育成を目指してきた「生きる力」であると記されている。そこで筆者は「曲想と音楽の構造との関わり」に焦点を当て、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の統合的育成を目指した鑑賞授業を立案し実践した。本発表では第6学年を対象とした「道化師のギャロップ」を用いた授業実践の概要と本授業に参加した児童の学びの実態を報告する。

アメリカのコモン・コアにおける English Language Arts のカリキュラム構成から大学英語教育への応用を考える

杉本 裕代 東京都市大学 講師

2010年にアメリカで制定された共通学習基礎州基準((Common Core State Standards、以後 CCSS)では、English Language Art (ELA) と Mathematics に対して、習得段階が明示され、その段階ごとに学習目標や獲得するスキルが提示されている。学びという多種多様な現象に対して、枠組みや段階を設置するというこの取り組みは、スタンダード化に伴う弊害などが指摘され、とりわけ数学科目について批判されることも多い。一方で、ELA は、CCSS より以前から、初等・中等教育において中心的な役割を果たしてきた科目であり、市民教育としての基盤ともなっている。そして、CCSS の ELA のカリキュラムは、文学的言語表現についても、段階的にカリキュラムに組み込まれ、目標とスキルが明示されている。本ポスターでは、ELA の全体像を把握しながら、とくに文学的読みに関係する部分に注目し、どのように提示されているかを整理する。そして、そこに示されるキーワードから、日本の大学英語に応用できる部分を検討してみたい。
